

猫 蓑 通 信

第 125号

令和六年
(2024年)
10月15日発行
(年3回発行)

猫蓑庵二世襲号祝賀の百韻興行 林 転石

令和六年度猫蓑会総会において、鈴木千恵子猫蓑会会長の猫蓑庵二世襲号が発表された。その祝賀として百韻を興行することとなり、世話を仰せつかった。

猫蓑会総会に御欠席の皆様には、次のような挨拶文を、緑華亭坂本孝子宗匠との連名で送付させていただいた。

猫蓑同人会に於いて、鈴木千恵子さんを宗匠に任ずる允可を与えました。千恵子さんは早くから明雅先生の薫陶を受け、蕉風俳諧の研究を深め、連句を志す初学の方へ後援、助力を傾けている事は衆目の一致するところudur。これにつき猫蓑会理事会からのご推挽もあり、宗匠として立机し猫蓑庵二世を襲号する事となりました。猫蓑会会員の方々は、明雅先生の連句への志を具現すべく一致同心して千恵子宗匠に協力し、猫蓑会の発展に寄与するとともに広く連句の振興にあたって頂きたいと考えます。猫蓑会としては平成十一年の唐猫庵瑞枝・冬

霞庵淳子・臥猫庵千町・袖菊庵好敏・卯遊庵志げ子各氏の立机祝賀の百韻五巻「松五本」以来、二十五年ぶりの立机祝賀の付廻し百韻となる。平成十六年一月に生々庵秀樹・南州庵健悟・朱鷺庵文字・爽楽庵路子各宗匠の立机があったが、前年に東明雅先生が亡くなられたこともあって、文台開（ふんだいびらき。文台を披露すること）のにぎにぎしいところは避け百韻興行も行わなかった。今回は先輩諸氏、関係の方々にも参加していただき猫蓑会会員も加わっての百韻となる。目下肅々と一巻が進行中である。おおいに奮発して頂きたい。

百韻という呼称は聯句（漢詩）の影響をうけたものと考えられるが、韻をふまない連歌をなぜ百韻と称するのか。「連歌を百韻など申す。しかるべからず。連歌はただ百句などにてあるべし。さりながら近ごろ申し付けたる事にて侍れば、今さら本説を正しても詮なき事にて侍るべき。大方はいはれなき事ぞ」（『筑波問答』）とあるようにこの呼称の由来は明らかでない。

百韻ともなると句に読み込む題材、趣向も同好のものとなり、重複する場所が見られるところである。式目的には三句去り、特別のものは五句去りとなるが同じ題材、同じ趣向は出来るだけ離して付けるというのが実作の場での常道

●目次●

▽猫蓑庵二世襲号祝賀の百韻興行	林 転石	1
◎第百六十七回例会（藤祭例会）作品七巻		3
▽亀戸天神藤祭正式俳諧見字記	上原揺子	5
▽執筆を終えて	佐藤徹心	6
◎令和六年第三十四回同人会作品五巻		7
▽猫蓑会歴代宗匠一覽		9
▽悼 臥猫庵原田千町文	緑華亭坂本孝子	10
▽川柳と連句と	宮川尚子	11
◎第28回えひめ俳句連句大会受賞作品		13
▽【留書】「青鷺」の巻をめぐる出来事		13
●事務局だより	井上里美	16

であると思う。
ちなみに連歌の百韻に於いてはどのように題材、展開をとっているかを見てみよう。

まず水無瀬三吟（宗祇・肖柏・宗長 長享二年・一四八八）をみれば、冒頭、「雪ながら山本かすむ夕べかな」「行く水遠く梅匂ふ里」と太平の世界を寿ぐ。「冬がれのあしたつわびてたての江に」「うづら鳴くかた山暮れてさむき日に」などの描写はさすがに王朝のよすがをとどめている。

ただ彼らの骨頂としての付合いの機知を發揮する座は畿内の戦乱により少なくなり諸国に座筵を求める事となる。「いたづらに明かず夜おほく秋聞けて」「色もなき言の葉にだに哀れしれ」「なれぬ住むぞ寂しさもうき」「うつろはんとはかねて知らずや」落魄を嘆きその窮状を慨

歎するものである。

「草木さへふるき都の恨みにて」「見しはみな古郷人の跡もうし」とその友誼は過去の友あるいは離れて会えぬ人である。宗祇が師と仰いだ心敬は既になく、古今伝授を授けた東常縁もこの作品成立の六年前に卒している。ただかれらは世をうらみ政道の不実を批判しているわけではない。「いやしきも身ををさむるはありつべし」「ひとにおしなべ道ぞただしき」と今の統治の形を肯定している。

一方、兼載俳諧独吟（猪苗代兼載 文龜三年・一五〇三）は水無瀬三吟とほぼ同時期に作られたものであるが世間を見る角度、その表現が著しく異なっている。描写されるのは兼載の周辺の群像であろうか、これを物語風におつてみると「ほころびがちに見ゆる袴」を着け、食事の際「花よりも実こそほしけれ桜鯛」「いそひで鳥をくはんとぞする」、宴たけなはともなれば「狂言ながらむしりあい」「人の物我が懐にぬすび人」も現れて、しかし、「白波の太刀をも持たず弓もなく」「蟬丸の杖をば人にうばはれて」しまう。

兼載はこの時期同族の猪苗代氏の内訌に巻き込まれ会津黒川に留め置かれており、その状況が作品の内容に色濃く反映している。恋句を見ても「傾城はあれとも宿に独り寝て」「唯恋しさは古さとの妻」と甚ださえない景のみ。日々の楽しみは、「桜木に酒と肴と取くいて」「猿楽の笛と太鼓を聞くばかり」。捨て鉢になって「世の中を不精ながらに捨てにけり」。すると「坊

主はつねにいさめども」これに逆上して癩癩を起し風雅の世界はいずこ。その怒りが収まれば、「つくづくと胸打ちつみて永日に」「世の中にまことの僧はなからめや」と仏の靈験を心待ちにし、「西に向かひておどり跳ねけり」と踊念仏の挙句となる。

この独吟は水無瀬三吟と同じく世相詠嘆を基調とするものの、登場する人物が生々しく描かれており、滑稽さを戯画化している。一方で、応仁の乱後の弛緩していく室町幕府の統治の荒廃を活写しているものでもある。兼載の連歌は、世の中の有様を写しながらも、それは時おり乱反射となるようである。

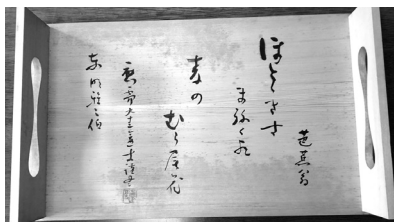
連歌と連句をひとしなみに扱うことはできないが、百句を連ねる座の文芸を、宗祇や兼載の時代から五百年を経て、今なお我々が行っていることは文学史上の奇跡といえるだろう。戦乱の世や時代の荒廃という荒波のなかで、彼らが詠んだ百句がわれわれに語り掛けることばは実に雄弁かつ深遠である。

猫蓑庵二世となる鈴木千恵子宗匠を祝賀するわれわれの百韻は、百年後、二百年後の人々にいったい何を語りかけるのであろうか。

東明雅先生は、平成七年（一九九五）四月の『猫蓑通信』第十九号の巻頭「宗匠」と題する記事で、「昔は俳諧の宗匠となるには、才能とともに非常な努力が必要であった」と書いておられる。そして「私は松島の月にあこがれ、吉野の花に心を悩ませた先人のあとを追い、ひたすらこの道の復活に努力してきた」ことを確認した上で、

「俳諧の精神を会得し、伝統を身につけた方をこの際新しい宗匠に指名して、この細道の同行者にしたいと思う」と書いておられる。また、平成七年立机式文集『ことし竹』の祝辞では、「そもそも、この立机・庵号授与ということは、芭蕉以来の俳諧の伝統を完全に会得・消化したことを前提とし、その上、皆さんの人柄・資質を勘案して、而後、宗匠として伝統を守るに十分と認めて人に限って授けるもの」で、「それだけに皆さんは選びぬかれた存在であるとともに、私の皆さんにかけられる期待も大きいと申さねばなりません」と気迫を込めた思いを綴っておられる。

今回の猫蓑庵二世の襲号は、東明雅先生の教えを受け継ぎ、俳諧連歌の精神を次世代へと継承し、猫蓑会がますます飛翔するための踏切板となることは間違いないだろう。それを寿ぐ百韻、どのような付けと変化で序破急が展開するのだろうか。一日千秋の思いで満尾が待たれる。



東明雅先生蔵の「村尾花文台」。裏には根津芦文翁染筆の芭蕉の句「ほととぎすまねくか妻のむら花」。

第百六十七回猫蓑会例会
藤祭例会 二十韻七巻 1〜3
令和六年四月二十四日(水)
亀戸天神社

阮籍の座

二十韻「大太鼓」

高山鄭和 捌

藤祭響きゆかしき大太鼓

鄭和

撫牛の背を濡らす春雨

雅子

めかり時文庫一冊読み終へて

鑑

豊の埃外へ掃き出す

京子

ウ 月浴びて励む蕎麦刈旧庄屋

俊子

合間にかかる袖湯順ぐり

和

長男の嫁はいやだと嘯かれ

雅

口説き文句をAIに聞く

鑑

鏡張りビルに映れるビルの影

京

路地の奥には子安観音

俊

ナオ 甚平を纏ひはりきるおしやまさん

和

麦酒で乾杯女先生

雅

即離婚迫る言葉に泡喰らひ

鑑

消しても消えぬ君のアドレス

京

山の端にけふもぼつかり月泛び

雅

松茸狩へ探す相棒

俊

ナウ ゴール決まつて客は総立ち

和

花の宴笑ひ上戸と泣き上戸

鑑

ほどよき風に舞ふ奴唄

京

連衆 武井雅子 荒木 鑑 鷺山京子

俊

三木俊子

三木俊子

替康の座

二十韻「藤の花」

西田荷夕 捌

藤の花小雨にけふる太鼓橋

荷夕

紫の傘開く春尽

香織

古里の三宝柑が届き来て

忠史

ピアノの音に合はせハミング

ゆうこ

宿直の教師見上ぐる夏の月

遥夢

でつぷりと男勝りの嫁もらふ

織

愛の力で甦る夫

史

輪島から食ひ初めの椀贈られて

ゆ

寄する波音テレビより漏れ

夢

ナオ 手枕で盃傾ける除夜の鐘

雄

暖炉の前に狎とじやれ合ふ

織

剛速球大谷のバット粉碎し

史

弁慶草がこんなところに

ゆ

月蒼き鴨川べりを寄り添ひて

雄

つまみ箸漸寒の闇

夢

ナウ 靴下の穴に気が付く奥座敷

織

峠にかかる銀輪の列

史

花の片集め不老の茶を点てよ

ゆ

耳に嬉しい流鶯の声

夢

連衆 平林香織 根津忠史 くぼゆうこ

史

石上遥夢 鈴木英雄

夢

石上遥夢 鈴木英雄

史

鈴木英雄

史

山濤の座

二十韻「昔を今に」

内田遊眠 捌

悠久の昔を今に藤香る

遊眠

ものけぶらせて降れる春雨

千恵子

塗り椀にめかぶとろろの漂ひて

定史

通過列車にひるがへる裾

万迷

誘はれてそぞろに歩く夏の月

揺子

ウ お女郎蜘蛛が獲物待つてる

千

一心にしやぶりつくせる骨までも

揺

山から山へ木霊饒舌

史

森の中コロポックルは瞑想し

迷

※ピッキの彫刻朽ちるままあり※

揺

ナオ 荒くれが船首に立てる碎氷船

千

茶飲み話は敗戦のこと

史

馴れ初めは動員先の工場

揺

野菊のやうな少女なりしが

千

月と雲そばに寄つたり離れたり

史

勝負を挑む団栗の独楽

千

ナウ 平穏を望む我らに救世主

眠

富は巨万で数多子宝

史

絢爛の九谷の盃に花の散る

迷

影長く引き種を蒔く人

史

連衆 鈴木千恵子 村松定史 吉澤万迷

史

上原揺子

史

上原揺子

※北海道出身砂澤ピッキ氏

第百六十七回猫蓑会例会

藤祭例会 二十韻七卷 4〜7

令和六年四月二十四日(水)
亀戸天神社

向秀の座

二十韻「小糠雨」

宇田川肇 捌

藤の香をまとふ社や小糠雨

肇

春の名残を渡す丹の橋

あき子

幼児のピアノ教室のどらかに

吉文

四コマ漫画まづは目に付き

敦子

ウ 出郷の電車の窓に月の射す

美智子

古城の蔵で醸す葡萄酒

肇

角笛の調べに踊る秋の園

あ

手を握られてそれがなれそめ

文

彼のため微妙なくびれキープして

敦

打ち水が好き裏の御隠居

智

ナオ あめんばう池底に影ゆらゆらと

あ

ジュラ紀の層に化石掘り出し

肇

スランプも内助の功でホームラン

敦

家族の幸を祈る凍月

文

黒塀に鳥啄む実南天

智

非常出口は急な階段

あ

ナウ 棟梁はここ一番で筋通す

肇

余興の手品皆にバカ受け

文

幾歳も変はらぬ花を愛つる夏

敦

斑の若駒すつくりと立ち

智

連衆 岩崎あき子 永田吉文 武井敦子

聖成美智子

劉俗の座

二十韻「広重の橋」

佐々木有子 捌

広重の橋をけむらす藤の雨

有子

往き来の人に深みゆく春

孝子

飛び立たぬ貌鳥とかほ合はせめて

季何

ふとしやつくりが止まらなくなるをんみ

をんみ

ウ 冬の月けふも屋台で独り酒

正夫

凍てつく道に渡す恋文

未悠

閉ぢられし博物館は式場に

季

畏みて添ふ先生と弟子

孝

スポーツカーキスの合間に夢を見て

同

株価ばつかり今は気になる

悠

ナオ 三十年買ひ換へてない扇風機

み

大河ドラマを父は欠かさず

夫

薬剤に前立腺癌寛解し

季

茜蜻蛉は水に子を産む

孝

有明の月の彼方の宇宙船

季

宅配便で届きたる柿

夫

ナウ 隣人と故郷同じくする奇遇

有

繰り返し読む啄木の歌

夫

枝垂れ咲く天下の花を巡り来ぬ

悠

大掃除して暮るる大寺

み

連衆 坂本孝子 堀田季何 福澤をんみ

國司正夫 棚町未悠

阮威の座

二十韻「太鼓の一打」

野口明子 捌

藤浪を揺らす太鼓の一打かな

明子

亀の甲羅に光る春雨

洋子

のびやかに背のぼすほど日永にて

宗淳

追ひかけ算をするすると解く

桜千子

ウ 涼風にクレープを焼く月の窓

転石

何も言はずに洗ひ髪撫つ

淳

猫のやうに甘え上手の恋人に

洋

理想の暮し実はA I

淳

原始では石のやじりの槍を投げ

石

いにしへの歌採譜する旅

桜

ナオ 山眠る睡眠障害かもしれず

淳

五臓六腑に染みる猪鍋

洋

金がらみ男がらみの相関図

石

断捨離好きの銀座チイママ

洋

月昇る輝く街へ人集ひ

淳

芸術祭に百号の空

桜

ナウ 虫の音が廢寺の庭に聞こえる

洋

掌に残りたる母のぬくもり

明

花吹雪野球やらうぜ女子チーム

桜

美酒酌み交はす麗らかな午後

石

連衆 大島洋子 春宮宗淳 鵜飼桜千子

林 転石

王戎の座
二十韻「藤を眼下に」 江津ひろみ 捌

一面の藤を眼下に太鼓橋 ひろみ
春の果なる横笛の音 純子

長閑なり録つた連ドラ見尽くして 秀夫

ごろ寝にまさる楽しみはなし 陽一郎

ウ 夕涼の山の端明し昇る月 恵子

水鉄砲で狙ふマドンナ 陽

マツチング百四回で決めました 恵

観音様はたくさんの顔 夫

外野席飛びゆく球を掴み取り 純

交差点にて探す明星 同

ナオご褒美に焼き薯もらふ盲導犬 夫

火の用心の後は飲み会 夫

恋敵押しが強さが勝負分け 陽

夜学の彼にバックハグする 恵

月の森獣は己が心配消し 純

いつ刺されたかふんと溢れ蚊 夫

ナウエンディングロールに飽きるロードショー 夫

源氏絵巻が残す王朝 恵

来し方を友と語らふ花の影 陽

バス待ちをれば柔らかな風 純

連衆 近藤純子 田中秀夫 秋山陽一郎

渡邊恵子



献花のための花を活ける花司



懐紙を綴るための水引をしこ執筆

亀戸天神藤祭 正式俳諧見学記 上原揺子

あいにくの雨だったが、亀戸天神の藤は今を盛りと咲いていた。正式俳諧の見学は今年で二回目だ。猫蓑会に入会したのが令和四年二月。まだ連句の右も左もわからないまま、お誘いに応じて昨年、一時帰国中の時間を利用して足を運んだ。今となれば笑い話だが「着物で正装」と小耳に挟んでいた。「私、持っていないのですが……」と、事務局の佐々木有子さんにおうかがいを立てたところ「それはお役の方だけに、見学の方の服装は自由ですよ」と。さて神楽殿ではそのお約束通りに、威儀を正した装いのお役の方々が勢揃いして興行が始まった。正式俳諧には定められた興行次第がありそれに則った所作も決められている。一堂に

会し、だが個々人でも物する——活花、文台捌、配硯などのしつらえも、茶道と共通するものがありそうだ。「型」を重んずるのは、それに心を傾けることで、日常から離れた「場」、別世界に身を投じる、という効もあるのかもしれない。

座は二十韻である。当日いただいたプリントにはナオ二句目までが載っていて、そのあとは空欄で、あけてのお楽しみというところ。去年はそれを知らず、お役の方々を含むご連衆の皆様はこの場で作句なさるのかと、いつもリモット、リアルに関わらず座で呻吟している私は驚愕したものだったが、さすがにそれはなく、事前に用意してあるようだ（少しホッとする）。

やがて周囲には立ち見の観光客も増え、興味を持ったらしい外国人には、高山鄭和さんが色々説明なさっていた。英語俳句は昨今、国際大会も開かれているほど盛況のようだが、そのうち英語連句も……などと夢想しているうちに、正式俳諧は終了した。連句の奥深さ、伝統の重みも垣間見たよい経験になった。



見学席にて筆者（右）と近藤純子さん

執筆を終えて 佐藤徹心

令和五年度の芭蕉忌・明雅忌正式俳諧の執筆を務めさせていただきました。猫蓑会の大切な行事の一端を務めるにあたり、先達の皆様からご指導をいただき、無事にお役を終えることができました。厚く御礼申し上げます。

平成二十年四月の亀戸天神社での藤祭奉納正式俳諧の録画を、手本とさせていただきます。宗匠・橘文字様、老長・原田千町様、執筆は鈴木千恵子様です。藤祭とあつて、女性陣は貴重な藤色系のお着物をお召しになっておられました。執筆は、深い藍に紫をにじませた紺の袴、わずかに赤味を帯びた黄色のお着物は花華（はず）でしょうか。花華はやや黄味の強い赤色で、古来、親王の色とされてきました。今では再現も難しそうですし、畏れ多いことでもあり、それよりも黄色味の多い、梔子色でしょうか。雅楽が奏される座をはずしと歩み出す白足袋は、黒髪を束ねる花飾りと相俟つて場内に清涼感を醸し出していました。

中央やや上座寄りに左膝より座し、神像・宗匠・他の皆様へ真・行の礼、後ろに向き直つて「ご一同様」と連衆に声をかける——ここから文台捌まで無言のうちに肅々と進む動きの中で、この連衆に向き直る動作は際立つ「一瞬の舞」です。これを会得せねばと、録画を手本に何回も



「ご一同様」の挨拶を終えて、御居処引き上げて、上座へ

練習しました。

『舞妓はレディ』という映画がありました。少女が面接・仕込みを経て見習の舞妓になる映画です。手始めは座る・立つの振舞の稽古からです。師匠は声高に言います。「正座する時は足の親指を重ねて」「御居処真中に降ろして」「立つ時は両の爪先立てて」「かかとの上に御居処降ろして」「左の膝立てて、すーっと御居処引き上げて」。映画では観客の期待通り、少女はここで尻餅をついて後ろに転んでしまいます。「一瞬の舞」の動作はこの尻餅の危険を孕んでいます。

失態しないための必須要因は「間」を意識することです。正座から爪先を立て、腰を浮かして、左膝を立て、右膝を立てると同時に左膝を降ろしながら体を一八〇度回転して膝を移し、右膝を戻し、正座の形にもどり連衆に対する。一つの動作が終ったことを確認し、「間」を取って次の動作へ。「間」の甲斐あって、「一瞬の舞」

を通過できました。

文台捌、下俳諧の読みあげ、付句、吟声と続きますが、手順ばかりが気がかりで、「間」を忘れ、動きが雑になっていたのが反省点です。懐紙を乗せた文台を床の間の芭蕉像に供え、雅楽の中を飯座に戻る時は身も心も軽くなつたような気がしました。人間は創造の喜びの中に居る時、苦悩や煩惱を忘れ穏やかな顔になるそうです。毎日そのような顔で生きて行けたら、きつと幸福な生涯が送れるのでしょうか。



文台と懐紙を床の間に供え、文箱、懐紙・水引の残り、文鎮をもつて飯座へ



正式俳諧お役一同



第三十四回同人会作品

歌仙五卷 152

令和六年六月二十三日(日)
於 アルカディア市ヶ谷

聖橋の座

歌仙「一矢はしる」

坂本孝子

剔

流鏑馬の一矢はしるや青葉陰

孝子

梅雨の晴れ間に集ふ人々

明子

仕出し屋は海山の幸盛るならん

洋子

テーブルクロス皺ひとつなく

英雄

月の舟ゆつくり渡る電波塔

香織

蜜の小皿を虫籠に置き

織

ウ 木の実降るかそけき音を録り溜めて

英

推しアイドルの目ざす全米

明

エアポケット支へた腕をそのままに

織

拾つたいのち禁断の愛

英

多情なる母の遺伝子受け継ぐか

洋

哀しき唄をうたふオンドル

同

連載の稿に追はるる冬の月

明

修験者は見たあれは UFO

英

都知事選女性候補の対決す

孝

素人落語の高座大うけ

織

紅白のワイン持寄り花筵

洋

昼寝とろりと囁の下

明

ナオ 厨房の浅瀬ぶくりと砂を吐き

織

離島に届く便りドローンで

洋

待てよなう勘三郎の俊寛は

織

不倫はいつか芸を深める

英

隠すほど滾る想ひで扉の中

深夜に遠く踏切の音

幼児の夢に生まるる川蜻蛉

氷砂糖を溶かす焼酎

のぞきこむ閻魔大王片目にて

バレエボールのエース速攻

五輪旗の並ぶサーヌの月を浴び

骨董市に絹の秋扇

ナウ 横丁の風情たのしみ獺祭忌

足にまつはる蒼い瞳の猫

長靴の片方何処に失せたやら

ボードゲームは孫を相手に

花吹雪舞へ外堀の水静か

絵巻のやうに霞む故郷

連衆 野口明子 大島洋子 鈴木英雄

平林香織

堀留橋の座

歌仙「五月雨」

堀留橋の座

國司正夫

剔

対岸にけふるキャンパス五月雨

夏の燕の過る外濠

馥郁と香る珈琲楽しみて

リクエストするジャズのナンバー

十六夜の和服の似合ふ異邦人

老舗そば屋にはやも新蕎麦

秋渇体重計が気になつて

ランデブーにはボチが付添ひ

張り切つてダンスパーティーエスコート

隠すほど滾る想ひで扉の中

深夜に遠く踏切の音

幼児の夢に生まるる川蜻蛉

氷砂糖を溶かす焼酎

のぞきこむ閻魔大王片目にて

バレエボールのエース速攻

五輪旗の並ぶサーヌの月を浴び

骨董市に絹の秋扇

ナウ 横丁の風情たのしみ獺祭忌

足にまつはる蒼い瞳の猫

長靴の片方何処に失せたやら

ボードゲームは孫を相手に

花吹雪舞へ外堀の水静か

絵巻のやうに霞む故郷

連衆 野口明子 大島洋子 鈴木英雄

平林香織

堀留橋の座

歌仙「五月雨」

堀留橋の座

國司正夫

剔

対岸にけふるキャンパス五月雨

夏の燕の過る外濠

馥郁と香る珈琲楽しみて

リクエストするジャズのナンバー

十六夜の和服の似合ふ異邦人

老舗そば屋にはやも新蕎麦

秋渇体重計が気になつて

ランデブーにはボチが付添ひ

張り切つてダンスパーティーエスコート

瞳の中に君の情熱

叡王戦藤井聡太がつひに負け

きゅつと一杯呷る爛酒

深々とカムイコタンの月冴ゆる

笛の音高く遠ざかり行く

町医者の待合室は集会所

揃つて掃除寺の参道

島巡る連絡船の花便り

海女にふはりと大陸の風

ナオ ブランドは買はぬ私の春コート

スポーツジムは評判を呼ぶ

地区予選決勝戦に勝ち残り

茶筌かしやかしや茶をたてる刻

おきやあせと浴衣の婆が一喝す

西瓜割りする村の子供等

頭陀袋何でもかんでも入ります

銀座和光で指輪おねだり

AIに恋の行方を聞いてみる

ハート壊れる私生身で

律儀なる桂男の雲隠

日記代はりの短歌冷まし

ナウ 美術展力作を出し大賞に

オリンピックが楽しみなバ里

舗石蹴るキックボードよ止まらぬか

父の時計は自動巻にて

富士山へ続く街道飛花落花

友と語らふうらかな午後

連衆 武井雅子 西田荷夕 田中秀夫

岩崎あき子

瞳の中に君の情熱

叡王戦藤井聡太がつひに負け

きゅつと一杯呷る爛酒

深々とカムイコタンの月冴ゆる

笛の音高く遠ざかり行く

町医者の待合室は集会所

揃つて掃除寺の参道

島巡る連絡船の花便り

海女にふはりと大陸の風

ナオ ブランドは買はぬ私の春コート

スポーツジムは評判を呼ぶ

地区予選決勝戦に勝ち残り

茶筌かしやかしや茶をたてる刻

おきやあせと浴衣の婆が一喝す

西瓜割りする村の子供等

頭陀袋何でもかんでも入ります

銀座和光で指輪おねだり

AIに恋の行方を聞いてみる

ハート壊れる私生身で

律儀なる桂男の雲隠

日記代はりの短歌冷まし

ナウ 美術展力作を出し大賞に

オリンピックが楽しみなバ里

舗石蹴るキックボードよ止まらぬか

父の時計は自動巻にて

富士山へ続く街道飛花落花

友と語らふうらかな午後

連衆 武井雅子 西田荷夕 田中秀夫

岩崎あき子

第三十四回同人会作品

歌仙五卷 355

令和六年六月二十三日(日)
於 アルカディア市ヶ谷

昌平橋の座

歌仙「子燕や」

佐藤徹心 捌

子燕や流れたばしる堀の里

徹心

草木輝く待兼の梅雨

鑑

文机の落書の文字なぞりぬて

尚子

うっかり零すホットコーヒー

千恵子

山嶺に少し隠れる月今宵

濤声

裏の畑にすたく虫の音

美智子

ウ 同期会主役はいつも新走

鑑

奴の女に横恋慕する

なかなかに落ちぬあの娘は数学科

声

アンザイレンに宙吊りのまま

鑑

千の手で観音衆生度し給ふ

千

隣の人と株の話を

智

凍月を地平線まで追ひかけて

尚

植村直己眠るアラスカ

千

飼ひ主は犬のハーネス競ひ合ひ

鑑

経験浅い記者の沈黙

智

皺のなき背広の背に花の散る

千

野にはだれ雪退職の宴

声

ナオ 凧あがる空それぞれの領分に

尚

未来の夢を語る少年

智

英国のダービーつひに制覇する

声

右へ左へ走るスケボー

鑑

揺れ動く気持ち伝へる涙唄

心

見た目はかりにすぐに魅せられ

鑑

仲人はまかせといてと胸たたき

智

園のゴリラはアロハシャツ着る

声

はつたい粉パフパフさせてする返事

尚

国会議論あはぬ歯車

鑑

月の夜兎に読み聞かすかぐや姫

智

籠いつばいに拾ふ団栗

声

ナウ 犯人をかかしは誰か知つてゐる

鑑

どうあがいても解けぬ公案

尚

ヨガマットポーズの手足絡みたり

千

野菜スープに具材三十

声

掛け声で花洛を下る人力車

心

平和を祈り飛ばす風船

執筆

連衆 荒木 鑑 宮川尚子 鈴木千恵子

小原濤声 聖成美智子

歌仙「城の濠」

武井敦子 捌

駒塚橋の座

万緑や釣人憩ふ城の濠

敦子

梅雨空の下ゆるる水の面

吉文

グライダー低く遠くへ飛びゆきて

転石

放物線を黒板に描く

有子

居待月片言の友見守りぬ

純子

正門からの黄落の道

純

ウ ふたりして鹿に餌をやるハネムーン

有

よろづやの娘は再々婚とか

同

店の奥古鉄瓶に値がついて

石

パソコンアプリ更新をする

吉

欲しいものリストを送る祖父の許

純

布袋のやうな太つ腹なり

有

冴え冴えと街に響ける時の鐘

吉

スタントマンの剣に凍月

石

異母妹の処遇あれこれ立つ噂

同

巴里へ留学長年の夢

純

写メールで故郷の花送り来て

吉

遍路の宿は予約満杯

有

ナオ けふ免許返納となり青き踏む

石

土曜日曜医院混雑

敦

楽しみは翔平君のホームラン

有

飛行機雲の過ぎる大空

吉

鳥葬へ家族が急ぐ石の山

石

羅の影こちら見てゐる

純

惚れるのはいつも蒲柳の質の女

有

可愛さうとて別れられない

石

放言の党首になぜかファン多し

吉

「オリエント急行」敵さそひて

純

進んでも月は僕から離れずに

有

子らの集める秋珊瑚の実

純

ナウ 兄弟で主役脇役村芝居

有

郵便受けは口をあめぐり

吉

日に一度連絡船が着く港

石

ワイン片手にパイプくゆらす

純

幾世紀咲き誇りたる花大樹

敦

丈の短い春の外套

有

連衆 永田吉文 林 転石 佐々木有子

近藤純子

面影橋の座
歌仙「面影橋を」
高塚 霞 捌

青梅雨や面影橋を蛇の目傘
匂袋を忍ばせる袖 俊子 霞
接戦の囲碁の勝負は持ち越しに
微積分分すらすらと解く ひろみ
窓越しのわづかに歪む望の月 桜千子
ちよつとひとふり枝豆に塩 肇
棟梁の職人技で松手入 忠史
件の廊下ここを曲れば 史
クローゼット開けてナルニア国へとぶ 桜
覚醒剤で資金調達 肇
配当の無い株ばかり相続し 俊
猫駅長にも苦勞かけるね み
膝借りて天下国家の策を練り 肇
桂浜には月が寒々 史
ニューヨーク自由の女神待つてゐる 肇
わたしの彼は左利きなの 史
もののけに化かされさうな花の闇 み
雲雀東風吹く六道の辻 同
ナオのどらかに河馬の歯磨く飼育員 桜
村の長老武闘派と聞く 肇
ふさふさの白い顎鬚誇らしげ 俊
アスクレピオスの杖を頼りて 桜
孫悟空自由自在に飛び廻り 史
他言無用の姫の酒癖 俊
小指には赤い糸系結ばれて 史
ゴールテープをレコードで切る み

終りとは始まりですよ絵双六

原初の海は生命育み

澄みわたる月の明りのかぎりなく

沓脱石に鈴虫の籠

ナウ S L の汽笛遠のくそぞろ寒

水を呑んでる山頭火像

掌の卵の殻のざらついて

売れぬ役者の大ぎ発声

花祭々旅立ちの日を寿がん

心づくしの菜飯弁当

連衆 三木俊子 江津ひろみ 鶴飼桜千子

宇田川肇 根津忠史

桜

肇

俊

み

霞

史

桜

み

霞

執筆



猫養会歴代宗匠一覽

平成三年（一九九一）十月

羅浮亭 正江（秋元 正江）

行々子庵 平朗（杉江 平朗）

桃径庵 和子（式田 和子）

平成七年（一九九五）二月

粹庵 哲（中川 哲）

一穂庵 啓世（中島 啓世）

涼月庵 あかり（中田 政枝）

房連庵 麻子（内田 和子）

緑華亭 孝子（坂本 孝子）

梅香庵 久美子（副島久美子）

久慈庵 弘子（市野沢弘子）

平成十年（一九九八）四月

唐猫庵 瑞枝（大窪 瑞枝）

冬霞庵 淳子（上月 淳子）

臥猫庵 千町（原田 千町）

袖菊亭 好敏（豊田 好敏）

卯遊庵 志げ子（蒲原志げ子）

平成十六年（二〇〇四）一月

生生庵 秀樹（青木 秀樹）

南州庵 健悟（佛淵 健悟）

爽楽庵 路子（倉本 路子）

朱鷺庵 文子（橘 文子）

平成十五年（二〇〇三）四月

貝母亭 清子（下鉢 清子）

平成二十七年（二〇一五）十一月
桃径庵二世 恭子（式田 恭子）

計二十一名

悼 臥猫庵原田千町文
緑華亭坂本孝子

令和六年六月二十二日没 享年九十二歳

猫蓑会三期生の原田千町さんは、連句会の方で生れた。広い教養と閃き、豊かな表現力、併せて生来の美貌で、男性女性を問わず、ファンは少なくなかったのです。俳誌「未来図」で俳句の腕を磨かれ、東明雅門では、その付句に感動しない者はいないと言っても過言ではないでしょう。

長く都内高輪にお住まいでしたが、御夫君を亡くされ、お一人暮らしに御自身のお齢のこともお考えになり、月島のケア付きマンションに移られました。やがて、年賀状や季節のお便りも御自身できっぱりと止め、連句会からも潔く引退なさったのでした。平生は親しく連句の付けを競い合っていたお仲間がふいに身を引かれたのは何とも寂しいものでした。

今でも忘れられない付句に（うる覚えで間違っていたら御赦し下さい）

過ぎし恋歪みてダリの画のやうに 千町
スペインの超現実主義の画家サルバドール・ダリの名画。ものみな枯れ行く風景の中、時計の文字盤がぐんにやりと溶けて折れ曲がり、物に垂れ下がっている、しかも色彩鮮やかなあの画からの心象を、過ぎてしまった恋にたとえた——この一句に触れた時、脳天が痺れるような感覚を覚えました。

連句の同じ時代を過ごさせて頂いたことに感謝し、心より御冥福をお祈りいたします。
*猫蓑作品集2〜26に千町捌の作品掲載

*平成十一年立机文集『松五本』掲載の矢崎藍さん「賛・臥猫庵千町宗匠 臥猫庵千町姫まゐる」紹介の発句と付句

羅や誰に逢ふともなければども 千町

忘るまじアウシュビッツも広島も 多迦夫
地球は宙に浮かぶ宝石 千町



賦猫庵文台開の日に



明雅先生と千町さん

*参考 平成十五年の四名の立机に寄せた原田千町さんの「立机・文台・号」の一部を転載

立机するということは、現代にあつては実に格別なことなのだ、あらためてその意義の大きさを感している。宗匠は、和歌、連歌、俳諧、茶香、立華の師匠をいうが、俳諧の宗匠は曾ては点者、判者と同意語で、連句席上、執筆を従え一座の付運びを吟味するとされた。

文台を師から受け、号を許され俳諧師として世に通用することは、近世の俳諧隆盛期では珍しくなかつたであろうが、現代では正式に立机して俳諧師を名乗ることは、ごく稀だと思ふ。（中略）東明雅師は昭和五十六年からACCに於いて連句を教え始められた。明雅師の如く俳文学者で且つ実作の名手であられるのは誠に稀なことであり、その方から実作と理論を同時に教わり身につけて宗匠となることは真に幸いと言ふべきであろう。（中略）

立机は則ち宗匠になること、文台は宗匠の位の象徴でもある。一般には和歌、俳諧の席に用いる机のことで、懐紙、短冊を載せ置くものとされ、古くは榊の枝、松の枝、硯の蓋をもつて文台としたこともあつたようだ。（中略）

「席に望みて文台と我と間に髪を入れず、思ふ事速に云出て爰に至つて迷ふ念なし。文台引きおろせば則ち反故也」（赤冊子）とある如く、単に俳諧興行の具たるに止まらず、俳諧精神の象徴ともいふべきものなのだろう。

（『猫蓑通信』第53号平成十五年（二〇〇三）十月）

川柳と連句と 宮川尚子

今年の九月で川柳を始めて二十年になる。こんな話をしたら、「まあ、成人式ね」と言う人がいた。二十年書いているが、一向に成熟もしないし分別もつかない。連句は、川柳を始めて少し(たぶん一年くらい)経った頃に始めた。「川柳は俳諧の連歌の前付けがルーツだ」と聞いて「じゃあ、連句をやってみれば川柳が何かわかるかも」と知人の参加する連句会に押しかけたのがきっかけである。これも大きな錯覚で連句の会に参加したからといって川柳がわかるはずもなく、我ながら浅知恵にあきれるばかりだ。川柳の「何でもあり」世界から飛び込んでみると、「これはダメー」のいっぱいある世界なんだなあと驚いたことを覚えている。だから最初の頃は、ダメ回避に汲汲として連句の世界に踏み込めないまま周辺をぐるぐるしていた。その何年かが今となっては本当に悔しい。それでも連句を続けられたのは、人と人をつくる場の魅力が絶大だったからだと今ならわかる。

二〇一六年に愛知県で開催された国民文化祭・連句の祭典に連句と向き合い直すチャンスをもたらした。その開催準備の勉強のため、初めて自分から連句大会にも出かけるようになったのだ。十年選手の新人なので知らないことが多いが、それどころか恥ずかしいことの上無いが、それでも初めての座に加わり、初めての人に出会い、時

間を共有して作品を巻き上げることが楽しくてしかたない。「楽しい」という感覚の不思議さに打たれた。こんなに楽しいことに気づかずは何をやっていたのかと自分の不明にあきれかえって、可能な限り連句の場に出かけるようになった。出かければ新しい出会いがある。出会う人が、いちいち素敵すぎてびっくりする。人が変われば座の雰囲気もころっと変わってそれがまた面白い。連句の最大の魅力は時間も作品も人と紡ぐことであり、人とつくりあげる極上のライブだと感じ始めた。「文台引き下ろせば即ち反故」なんて天才芭蕉翁だから言える言葉で、私のような雑魚には何かの言い訳に使うのが精いっぱいだと思っていたが、ほんのちょっとくらいはわかるような気がした。

名古屋の桃雅会に青島ゆみをさんという先輩がいらつしゃった。お亡くなりになったあとに杉山壽子代表とご自宅をお訪ねして、奥様から芭蕉関連の遺稿をたくさんお預かりした。お預かりした役得で読ませていただいていると、はつとする言葉に出会う。「かれかならず此道にはなれず、取付侍る様にすべし。はいかいはなくても有るべし。ただ世に和せず、人情通ぜざれば人不調。まして宜しき友なくては成りがたし」と『三冊子』の中から芭蕉の言葉が引かれ、『山中問答』からは「世上に和し、人情に達すべしと、翁申たまひき」「俳諧は言語の遊びにして、信をもつて交る道なり」と引用されている。座の人々を尊重し、そこにいる人が皆よい時間を過ごした、よい話ができたと考える俳諧

の座が持てることが大切なのだ。どの座も一度限りのかけがえのないものであり、だからこそ「文台引き下ろせば即ち反故」なのだろう。

川柳を書いていても人との交流は生まれる。同じ句会に長く所属している仲間もいるし、私はその経験が極めて少ないほうだが、あちこちの大会に参加すればいろいろな方に出会う。それは、もちろん幸せなことである。私自身も川柳を通して多くの敬愛する人々に出会った。しかし、言わずもがなではあるが、作品を書くときには一人であり、それぞれのできあがった作品を持って出会う人なのだ。だから、「川柳は人である」とは言えないし言わない。それに対して連句では座を共にする人がいなければ作品が生まれえない。連衆のうちの一人が入れ替わったとしても作品の転がっていく先は変わるだろう。捌きが変われば、同じ発句で始めたとしても全く異なる作品が生まれる。お互いへの信頼があれば、自由に遊んで作品をはばたかせることができる。一人ではない力で、また見たことのない世界を開くことも可能にするのが連句ではないだろうか。そういう意味で、人あってこそ、そして人を大切にする気持ちがあつてこそ連句ではないかと感じている。

川柳と連句には当然のように大きな違いがあるのだが、最近この二つの文芸の共通点について考えることも多い。この二つの文芸には、ジャンルを超える力があるのではないかと思うのである。私は名古屋でねじまき句会という川柳の句会に参加している。ここには、川柳を書

くことを専らにしている人もいるが、短歌を書く人、俳句を書く人、詩を書く人も参加している。川柳は「抛つて立つところ」と言われると脆弱な文芸かもしれないが、自由度の高さが新しい何かを生み出す期待につながっているように思う。また数年前に川柳句会と同じイーブルなごやを拠点にして立ち上げたねじまき連句会には連句だけでなく、俳句、川柳、狂俳などの複数のジャンルからの参加者がある。そう思っで見渡してみると、三島ゆかりさんが編集人を務める連句誌『みしみし』にはジャンルを超えた人たちがたくさん参加して盛り上がりを見せている。仙台で始まったブレンド句会は各地から俳人・川柳人の参加する年に一度の句会だが、翌日には連句会も開かれている。五七五と七七を前へ前へと展開していく連句に、さまざまジャンルから集まった人の言葉が紡がれて、見たことのない世界が開かれる「どきどき」や「わくわく」が感じられるからではないだろうか。

川柳はある意味では寄る辺ないとさえ思える自由さによって、連句は人によってつくられる場の熱量によって、「今」を越えていくうとしていくのだ。川柳と連句、この二つ関わることでできたのは、必然を秘めた偶然だったような気がして、心から有難く思っている。



筆者が編集する句誌『川柳 ねじまき』

著者の川柳句集

瀧村小奈生『留守にしております』

(左右社 二〇二三年刊) より

のがのならなんのことない春の日の
 ルーシーがお空で飼っているくじら
 待っている二月みたいな顔をして
 三月じゃなくってゼリーでもなくて
 鳥雲にクッピーラムネイチョゴ味
 さくらちるまたねまたねと言いつつ
 靴踏んで、ねえ、白すぎるから踏んで
 パパとママ呼ぶとき口唇破裂音
 ひっぱると夜となにかが落ちてくる
 完璧な曇り空です。あ、ひらく
 きようこそは雲らしいことをしようね
 境界のいつもは水の側にいる
 誰よりもうつくしく剝く茹で卵

一線を画してバンドエイド貼る

きようもまだ雨音になれなかったな

みずうみになりたいひとが降ってくる

海だったところが夜になっている

言い訳の代わりに九九をずっと言う

恥ずかしいところにヌスビトハギつけて

がんばって擦るとたぶん消える月

ルリヤナギ傾く方が秋ですよ

息止めて止めて止めて 櫛



山形県大石田 芭蕉が3泊した船宿
 高野一栄跡(次ページ留書参照)

第28回えひめ俵口連句大会受賞作品
歌仙五巻 1

愛媛新聞社長賞

歌仙「青鷺」

井上里美

捌

青鷺の一羽留まる三角州

里美

浜昼顔のからみつく枝

良子

別荘でジャズレコードにひたるらん

純子

偏西風の気配感じて

徹心

旅最中砂漠彼方にけふの月

良

着日指定で届く大梨

美

興に乗る跳人の鈴は鳴り止まず

心

スニーカーからのぞく艶足

純

醜聞に尾ひれゆらゆら恋燃えて

美

信夫文字摺千反の綾

良

忽ちに工場跡地ギヤラリーに

心

自販機の前小銭数へる

純

月中天つると飲んで寒卵

良

凍土融解地球沸騰

美

水底の母艦は時の告発者

心

同郷人でゆるくつながり

純

まあまあと注がれる酒花の宴

美

都踊りに憧れてをり

良

春昼にけだるく変はる信号機

純

喫煙場所は屋上の隅

心

両親に孝行なんて大嫌ひ

良

ひいふうみいで背負ひ投げする

美

栄転の辞令靴にプロポーズ

心

桜桃食べる君が素敵だ

純

古窓に巴里祭の空映り込み

美

塵も浮かべて大河悠々

良

期せずしてNPOの代表に

名刺の裏に口座番号

有明にしばし静まる魚市場

包丁塚へ色葉降り散り

ナウ新蕎麦を切る音で知る腕の良さ

背筋まつすぐ図面引く父

騙し絵と知つてなおさら立ち尽くす

純 心 同 美 良 純 美

【留書】「青鷺」の巻をめぐる出来事
井上里美

アオサギのアニメで宮崎駿監督がアカデミー賞受賞したとのニュースをスマホで見ながら帰宅いたしますと、ポストに「青鷺」の巻入賞の報せ！驚愕のあまり靴を脱ぐことも忘れ、玄関先から私にとって大切な師であるご連絡皆様方に受賞速報をお送り申し上げ、祝辞を交換いたしました夜がつい昨日のことようです。

実は、大会申込のわずか数分前、巻きたてほやほや？での応募となったこの巻。「作品集」にご連衆との足跡を刻み、国会図書館に収まりたい、そんな私の下心のみで応募しました。文音の最中、初めての帯状疱疹に苦しみ中断させていたこと、挙句を目前に大きなアクシデントに見舞われたご連絡があったことで、「共に生きた時間、世界、認識を共に味わい、共に一つの作品として残す」連句の価値に思い感極まった巻です。「入賞」という大きなおまけ(立派な盾)までいただけるとはまさに奇跡。この巻の発句で詠んだのは、京都鴨川のほとりから眺めた青鷺です。京都は、私と連句との

カーブ煽やか百済観音
見上ぐれば稜線溶かす花吹雪
初虹かかる街へ引つ越し
純 心 執筆

連衆 本屋良子 近藤純子 佐藤徹心
令和五年六月三日 起首
同六年一月二十九日 満尾 於 文音

出合いの場所です。下鴨神社の御手洗祭を共に旅した近藤純子様、糺の森を歩いていた時に「連句の宿題」について話されたことを耳にし、風雅で素敵なご趣味をお持ちなんですね、と会話が広がりました。私は、『奥の細道』『大石田』に生まれ、保育園の親子旅行では「山寺芭蕉苑」遊園地のジェットコースターに乗ったりして育ちましたが、山寺の岩に染み入る蝉の声も、五月雨を集めた最上川も身近過ぎて、風雅とはかけ離れたガサツな青春時代を過ごし、就職で上京してからこのアラフィフまでの四半世紀あまり、たいした習い事や趣味もなく過ごしてシニア突入、という自分の生き様にややコンプレックスを抱えていることなどを近藤様にお話申し上げたら、連句の教室体験をお誘いいただきました。これが猫蓑会幽霊会員の私の成り立ちでもあります。

先達の皆様様には、教室や文音、連句会にと、様々な参加の機会を広げていただき、また、いつも丁寧な、連句とは何か、どう味わうのか、どうつくるのか、捌くのか、楽しむのか、ほんとうにたくさんのお話を教えていただきました。心より御礼申し上げます。光栄な機会をありがとうございました。

第28回えひめ俵口連句大会受賞作品

歌仙五巻 255

南海放送賞

歌仙「ミックジャガーは」 捌 江津ひろみ

ミックジャガーは不良で傘寿吾亦紅 ひろみ

檸檬搾りて呷るウオッカ 葵

火口湖に水鏡する月ならん 霞

等高線の狭き地形図 み

五時限め験がどうも重くなり 葵

鼻を掻くやら咳払ひやら 霞

めでたくも寒鰯の競り高値つき み

大風呂敷の出番いよいよ 葵

家系図を辿りさまよふ夢の中 霞

無精髭さへかつこいい奴 み

じやんけんで勝つて押しかけ女房に 葵

弛む青蚊帳深き暗闇 霞

やはらかな夜干しの梅は月を浴び み

記憶の中の私幼く 葵

アルバムの悪童やたら緊張し 霞

宿無し犬をこつそりと世話 み

千年の花籠と化し天昇る 葵

観潮船はゆるり出港 霞

ナオ 橋建設春の起工に酒を撒き み

国会議員知事に市長に 葵

少子化と言ふもとんちんかんな策 霞

身体に合はぬ服を新調 み

着ぐるみの中の人つて俺なのさ 霞

くつきり二本角の影あり 葵

底冷に若き大黒艶然と み

氷の肌が燃えて溶けさう 霞

売り切れのアイスクリームミント味 葵

スペイン広場掏摸に用心 み

月を追ひ巡礼の列黙々と 葵

流星ひとつ山陰に消ゆ 霞

ナウ 自在鉤に滾る鉄瓶そぞろ寒 み

汽笛かすかに耳に残れり 霞

鷗飛ぶテトラポットに腰掛けて 葵

少年たちは未来語らふ 霞

ごつい根と土と水とが花咲かす み

霜除解けば風巡る苑 葵

連衆 石川 葵 高塚 霞

令和五年十月二十一日 起首

令和五年十二月二十九日 満尾 於 文音

庚申庵倶楽部賞

「東京マラソン」の巻 荒木 鑑 捌

春愁をはらふマラソン走者達 鑑

凜と香れる梅の紅白 秀夫

蛤を梨地の椀に注ぎわけて 雅子

三人寄ればゲーム始める 美代子

歴史書の占める本棚月照らす 純子

ちよつと躊躇ひたく溢蚊 雅

万妖祭魔女役いつも奪ひ合ひ 純

恋の王道先手必勝 鑑

ウ やんはりとかんにんどすえと返されて 雅

忘れたころにラブレター来る 夫

ブーム去る記念コインのコレクション 代

焼けるそばから売れる鯛焼 鑑

月の下十夜念仏通り過ぎ 雅

頬で感じる柔き母の背 代

型で入り型にて終はる空手道 夫

蒸気機関車汽笛遠くに 同

乗り継ぎで一筆書きの花の旅 代

浜を歩けばかひやぐら立つ 雅

ナオ 風光る窓辺の写真並べかへ 純

よろづ相談寄せる交番 夫

黄身うまく掬へた今日のゆで卵 鑑

NASAも視野にと自信ふつふつ 夫

君とならグランドキャニオン行きたいな 代

アイスクリーム同じスプーンで 夫

おくてなの咳く彼女超大胆 代

赤信号を又も通過し 雅

ごますりと付度だけで部長まで 鑑

土日配送中止唐突 代

新酒には月の友らのお待ちかね 夫

権禰宜の説くたとへさやけし 純

ナウ 茸狩りの山は誰にも秘密にて 雅

リモート会議続く週末 純

ひと通りボケとツツコミ関西弁 夫

癒しの曲でほぐす筋肉 代

花びらの水際染め抜く散りてなほ 鑑

雉の遊ぶ故郷の丘 雅

連衆 田中秀夫 武井雅子 山田美代子

近藤純子

令和五年三月五日 首尾

於 江東区芭蕉記念館

俵口賞
歌仙「青春の疵」 鈴木千恵子 捌

青春の疵も混じれる曝書かな 千恵子
 鉄砲百合の淡きみどりよ 孝子
 ギタリスト世界のリズム取り入れて ひろみ
 コインを投げて決める順番 肇
 月の宴べくさかづきを持つたまま 有子
 秋鱈盛る大ぶりの皿 転石
 アトリエの忘れ団扇に名のありて 秀夫
 ハニーと呼んでトラブルを避け 有
 たまさかに母を降りたき昼下り 肇
 南回りで定刻に着く 孝
 あどけない顔して麻葉探知犬 肇
 メフィストフェレスと結ぶ契約 有
 仰ぎ見る法王庁の冬の月 石
 川凍つる前願ふ停戦 有
 体操の選手の着地よろめいて 有
 息をとめてはレントゲン撮る 有
 飛び立てる鳥一斉に花の庭 有
 お返事もよく園児遠足 有
 ナオ 石段を上れば霞む船の影 肇
 鎌倉武士が奉納の絵馬 肇
 伝説に小さき真実潜みをり 有
 八重跳びでギネス登録 有
 夏大根夏蕪夏夏夏玉葱 有
 錦市場へ炎暑逃れて 有
 すれ違ふ女の姿透きとほり 有
 アンネの日記恋に恋する 有

脱走の兵を匿ふ私娼窟 孝
 金平糖を舌に転がし 有
 鯨に月を頂く天守閣 孝
 防災の日に鳴らすサイレン 夫
 ナウ猪が出たと村中大騒ぎ 石
 無投票にてみんな当選 夫
 同じ名がマイナンバーを狂はせる 石
 何の種だかとりあへず時く 夫
 花の夢覚めて未だに夢にあり 千
 砂鉄の浜に寄せる紅貝 肇

連衆 坂本孝子 江津ひろみ 宇田川肇
 佐々木有子 林 転石 田中秀夫
 令和五年七月二十二日 首尾
 於 緑華亭

俵口賞
歌仙「問答の」 鈴木千恵子 捌

問答のありし出湯の谷紅葉 千恵子
 飛蝗にひかれ辿るこの道 徹心
 月明りからくり人形待ち兼ねて 忠史
 テーマパークの電子オルガン 荷夕
 スパイスの効いたカレーの匂ひくる 心
 つまみ洗ひの白服の染み 千
 三男は気楽に生きる根無草 夕
 あこがれの彼かかるドラフト 史
 右腕はわたしのために空けといて 千
 地下酒場では夢を売つてる 心
 効率を考へ籤は連番で 史

紙鉄砲を避ける凍月 夕
 音もなく梟の爪闇を裂く 心
 ゴッドハンドの医師の執刀 千
 鍵隠す階段筆筒の抽斗に 夕
 数の合はない由緒ある皿 史
 六体の花の地蔵に参りたる 千
 腰の籠にはごこみいつばい 心
 ナオ やどかりは己の丈の貝選ぶ 史
 ミニバン巡る過疎の村々 夕
 繰り返しかけるCD八代亜紀 心
 だいぢやうぶだよ根拠ないけど 千
 二重跳び競ひあつてる子供達 夕
 曾我祭には傘をかついで 史
 紫の鉢巻姿に惚れました 千
 人力車夫の尽す幸せ 心
 我が儘な外交官のお嬢様 史
 進水式に砕くシャンパン 夕

鳴き砂の椰子の樹の影月まるく 心
 瓜坊の背にきじむなあ乗る 千
 ナウ 秋澄みて古本探す旧市街 夕
 円安基調一喜一憂 史
 黒と白オセロゲームの大逆転 千
 奥の院より入相の鐘 心
 単線列車花の隧道抜けてゆく 史
 蓬摘むひと遠近に見ゆ 夕
 連衆 佐藤徹心 根津忠史 西田荷夕
 令和五年十一月五日 首尾
 於 江東区芭蕉記念館

●既往の行事

- 六月二十三日(日)に、アルカディア市ヶ谷にて、第三十四回猫蓑同人会総会を開催。歌仙興行。当日作品は今号7〜9ページに掲載。
- 七月二十八日(日)に、江東区芭蕉記念館にて、第百六十八回例会(猫蓑会総会)を開催。歌仙興行。当日作品は次号に掲載予定。

●今後の行事予定

- 十月十六日(水)、江東区芭蕉記念館にて第百六十九回例会(芭蕉忌・明雅忌)を開催予定。正式俳諧興行の後、源心興行。
- 令和七年一月二十六日(日)に、アルカディア市ヶ谷にて、第百七十回例会(初懐紙・猫蓑庵二世文台披露)を開催予定。歌仙興行。
- 同四月下旬に、亀戸天神社にて、第百七十一回例会(藤祭例会)を開催予定。神楽殿にて正式俳諧興行(一般公開)後、二十韻興行。
- 猫蓑会リモート連句会
 - 第二十二回・第二十二回を六月八日(土)・八月十日(土)に開催。作品を猫蓑会HPに掲載。
 - 第二十三回を十月十四日(月)・スポーツの日に開催。

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます。

- 佐藤徹心様 令和六年五月 五千元
- 五郎丸照子様 令和六年五月 三千元

- 関口恵美子様 令和六年五月 一万円
- 岡本遊風様 令和六年六月 三千元

- 基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金 普通預金 3376045

●会員の転居

- 白崎ひろ子 福井県↓東京都へ

●新入会員

- 永井信夫 (茨城県) 令和六年五月入会
- 関口恵美子 (茨城県) 令和六年五月入会
- 片平峰青 (鹿児島県) 令和六年九月入会
- 原 昌子 (神奈川県) 令和六年九月入会

●前号の訂正 申し訳ありませんでした。

- 連句の先達誌上インタビュー 8ページ下段 (Q3 初めての実作の場合はどこでしたか、どのような様子でしたか)
- (誤)「付くものはつくけれど付かないものは付かない」ということば
- (正)「有るものは付くけれど無いものは付かない」とこっぴどく叱っていたいた事を

【補足】

記事を読まれた加藤亀女さんから本屋良子さんに訂正依頼のお手紙がありました。書簡に認められたその時のエピソードをご紹介します。

亀女さんが出された付句は、植木屋さんが休憩中の一服で、キセルタバコの火を手のひらに受けてその火を次の一服の火種にした」という

内容のものだったそうです。明雅先生は、「いくら手仕事ででのひらの皮膚が厚くなっている植木屋さんでも、そんなことはできない」とおっしゃったそうです。「本当にこっぴどく叱っていただきました。それ以来無い物は付けない事を肝に命じてきました」とのことです。亀女さんは、これが連句を続けているうえで、「心のバイブル」ともお書きになっています。(編集人記)

- 「えひめ山口と松山」11ページ下段4行目(誤)「水鶏啼くと人のいへばや水鶏塚」
- (正)「水鶏啼くと人のいへばや佐屋泊」



愛知県愛西市佐屋町の水鶏塚

●『猫蓑作品集』27を来年刊行します。

作品提出締切は四月末です。詳細は次号に掲載予定。

定期刊行 『猫蓑通信』第百二十五号

発行人 令和六年十月十五日発行

猫蓑会 鈴木千恵子

事務局 佐々木有子

〒161-0033

東京都新宿区下落合4-9-34・313

編集人 平林香織

編集委員 岩崎あき子・奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・武井雅子・田中秀夫

(五十音順)

印刷所 関東図書株式会社